

昔むかし、あるところに、王さまがいました。王さまにはお姫さまがひとりありましたが、いつも息子がほしいと思っていました。

あるとき、王さまはコックに、

「どこからか男の子を探してきてはくれないか。養ってやりたいんだが」とたのみました。コックは、

「まずしい獵師を知っていますが、そいつならきつと息子をひとりくれるでしょう」といいました。王さまはさっそくコックを獵師のところにつかわして、息子のうちのひとりをおれないか、もしくれば、その子を自分の子として育てたいのだがとたずねさせました。

獵師は、よろこんで、

「ねがつてもないことです。王さまにわしの四歳になる息子をさしあげましょう」といいました。

王さまのお姫さまもちょうど四歳でした。獵師の息子とお姫さまはきょうだいのように育てられ、とてもなかよくなりました。やがて獵師の息子はりっぱな若者になり、お姫さまも美しい娘になりました。

ある日のこと、お姫さまが母親のところへ行つて、若者と結婚したいといいました。それを聞いて、王さまは、お姫さまにいいました。

「わしはあの子を王の息子として育ててきた。だから、結婚式を終えてふたりで寢室にもどつても、けつして、ほんとうは獵師の息子なんだということをいってはいけないよ。もしもいったら、いっしょに暮らすことができなくなるからね」

まもなく、若者とお姫さまは結婚しました。結婚式のあと、ふたりは寢室にもどつて楽しくおしゃべりを始めました。お姫さまは、

「ああ、思いどおりになってよかったわ。あなたはほんとは、まずしい獵師の息子だったのね」といいました。それを聞いたとたん、若者は腹を立て、結婚式の衣装を花嫁の足元に投げすてて、部屋から出ていきました。そして、歩きに歩き、遠いよその国へ行つてしまいました。

若者は、道で出会ったまずしい男と服を取りかえて、また歩いていきました。ただ、ダ



イヤモンドの指輪だけは腰ひものに隠しておきました。

やがて、若者は、ある町の王さまのお城で、台所の下働きとして働くことになりました。若者は、口がきけないふりをして、身ぶり手ぶりで話をしました。

あるとき、王さまが台所に下りてきて、美しい顔立ちをした若者に気づきました。そしてコックに、

「あれはいつたいただね」とたずねました。コックは、

「あれは、うちの台所の下働きです。なかなかよく働くのですが、残念なことに口がきけません」と答えました。王さまは、

「あいつは、すばらしい若者だ。よし、わしがきくとあの子に言葉をとりもどさせてやろう」といいました。そして、すぐにおふれを出しました。

「わが城の下働きの若者に、言葉をとりもどさせることができた者は、王の後継ぎにしよう。だが、失敗したものは、首を切られるだろう」

すると、たくさんのお医者や学者先生たちが、若者に言葉をとりもどさせようとやって来ました。けれども、みな失敗して首を切られてしまいました。とうとう、やってみる者はだれもいなくなりました。

あるときのことです。若者がスープのお皿を洗っていて、うっかり手をすべらせて落としそうになりました。若者は思わず、

「おっと、あやうく皿を割るとこだった」といいました。コックはこれを聞いて、

(あいつ口がきけるじゃないか)と思いました。

コックは、王さまのところに行って、

「わたしが、あの若者に言葉をとりもどしてみせます」といいました。王さまは、

「いやいや。おまえはなぜ命をすてようとするんだ」といってとめました。けれどもコックは、

「王さま、ご心配なく。あいつはきつと話せるようになります」といいはりました。王さまは、

「よろしい。ではおまえに三日間あたえよう。三日たってもあの男がしゃべらなかつたら、おまえの首を切らせるぞ」といいわたしました。

コックは、若者とふたりきりで部屋にとじこもり、なんとかしてしゃべらせようとしま

したが、何をきいても若者は答えません。コックは腹を立てて、若者をむちでうち、着物をひきさきました。そのとき、腰ひもが切れてダイヤモンドの指輪がころがり落ちました。コックは、急いで指輪を拾ってお城から逃げだしました。

コックは旅をつづけ、ある国にたどり着きました。コックは指輪を売って食べ物を手に入れようと思つて、商人のところへ行きました。ところが商人は、

「ダイヤモンドなんて、買つてくれるのは王さまだけさ」といつて買つてくれません。そこでコックはお城へ行きました。お城のお姫さまは指輪を見て、それが、愛する若者のものだとすぐに気づきました。

「あなたは、この指輪をどこから持ってきたの」

「お姫さま、これは私のものではなくて、ある城のまずしい下働きのものなのです」

コックはそういつて、口をきけない若者のことを話し、王さまがこの若者に言葉をとりもどさせることができた者を後継ぎにする、失敗したら死刑だとおふれを出したことなど、すべて話しました。お姫さまはこれを聞くと、コックにお金をやつてたち去らせました。

つぎの日、お姫さまは男の服を着て、若者のいるお城へ出かけていきました。そして王さまに、若者に言葉をとりもどしてやるためにやってきたといいました。けれども王さまは、

「いや。わしはもうこれ以上、人の首を切らせたくないのだ」といいました。お姫さまは、「わたしに、最後の試みこころをさせてください」とたのみました。王さまは承知して、お姫さまを若者の部屋につれて行きました。

ふたりきりになると、お姫さまは若者にいいました。

「あなたを獵師の息子だといったことを、どうかゆるしてください」
けれども、若者は返事をしませんでした。

とうとう、お姫さまは首切り役人にひきわたされることになりました。いよいよ、広場に引きだされ、首が切られるというとき、お姫さまは王さまに、

「どうか、三言みことだけいわせてください」とたのみました。王さまは承知しました。お姫さまはいいました。

「だれかわたしの命を三ペニヒで買つてくれませんか」

だれも返事をしません。お姫さまはもういちどいいました。

「だれかわたしの命を二ペニヒで買ってくださいませんか」
みなおし黙だまったままです。

「だれか私の命を一ペニヒで買ってくださいませんか」
そのとき、若者がさげびました。

「ぼくが買おう」

こうして、若者は言葉をとりもどしたのです。

王さまは、お姫さまに、

「おまえにこの国をあたえよう」といいました。けれども、お姫さまは男の服を脱ぬぎ、じつはわたしはある国の王女で、結婚式の晩ばんに、若者に獵師の息子だといったために、若者が出ていってしまったことを話しました。

若者はお姫さまをゆるし、王さまは若者を後継ぎにしました。そこで、ふたりは、ふたつの国をおさめ、ふたつのお城で交代にしあわせに暮くしました。

原話：『世界の民話』38 地中海』小澤俊夫編訳／ぎょうせい

再話：村上郁